

## 1945年（昭和20）～1949年（昭和24）

1945年（昭和20）8月15日の終戦で、沓掛学荘疎開ノ家で生活していた子ども達の大半は引き揚げ、職員も東京の事業を再開するため疎開ノ家を解散しました。しかし、戦災で両親を失った孤児など20名は残留し、後に児童保護施設沓掛学荘が組織されます。

興望館では事業再開の準備として理事会が開催され、診療所の再開、産院の新設という方針を決め、保育園も地域住民の希望に応じて小規模なものから始めるとしました。復興にあたって、内外からの援助は欠かせず、厚生省、宮内庁、戦災援護会、原田積善会、服部奉公会、同胞援護会などへ補助を依頼しました。1948年（昭和23）12月には、東京都共同募金会より配分を受け、保育園改築、診療所の新築などの費用に充てました。これと並行して、海外からの公私の援助も多数あり、ララ物資などの政府を通しての配分、CCF（キリスト教児童基金）のようなキリスト教関係団体からの支援、そして、興望館関係の外国人などを通しての援助がありました。

1947年（昭和22）12月の児童福祉法制定により、1948年（昭和23）1月に沓掛学荘が児童養護施設に、同7月に興望館保育園が保育所に認可され、国などから措置費として恒常的な財源が保障されることになりました。

## 1950年（昭和25）～1969年（昭和44）

戦後最初に取り組んだ事業の一つである診療所は、1953年（昭和28）頃から診療所の新築計画が立てられ、基金などを資金に着工し、1955年（昭和30）3月に入院やレントゲン設備などを持つ二階建ての診療所が完成しました。創設以来、健康相談、母性相談や夜間診療を行い、戦後の地域医療活動に貢献した診療所でしたが、1966年（昭和41）11月、地域の開業医の復活と定着を見届け、閉鎖となりました。

昭和初期から少年少女部あるいはクラブという名称で、児童や青少年の健全育成にあたってきた青少年クラブですが、1956年（昭和31）1月に児童厚生施設として認可されました。当時の活動は、小学生、中学生、高校生、青年のクラブに分かれ、合計90名ほどを対象に曜日別プログラムが実施されていました。また、年間の行事として、遠足やキャンプ、運動会、クリスマス会など戦前からの実践を基本にしなから、時代を反映した学習的要素を取り入れた内容になっていました。

昭和30年代後半から日本は高度経済成長期を迎え、興望館の周辺地域でも中小の会社や工場が生産を拡大し、人手不足となるような好景気となりました。しかし、中小工場などには労働者のための給食設備がなかったため、興望館がそれらの人々のために給食を実施し、栄養補給と健康増進を図ることを目的に、1961年（昭和36）4月に協力食事部が設置されました。バイクによる配給から小型車による配給へと利用者も拡大していきましたが、昭和40年代後半に大規模な給食センターや工場内給食施設ができあがったため事業は不振になり、人手不足とも重なり1973年（昭和48）9月に廃止となりました。

一方、中小の家内工業の好況が続いたことで、保育園児の需要は高まりました。1964年（昭和39）に老朽化していた園舎を鉄筋コンクリート三階建ての園舎へ建替えるとともに、1969年（昭和44）には別館を新築しました。建築に要する資金については、募金委員会を結成して経済団体に積極的に呼びかけるほか、各団体の配分金や補助金、借入金に加え、社会福祉法人興望館として会債を発行して調達しました。

## 1970年（昭和45）～1979年（昭和54）

当時の日本経済は高度成長期の絶頂を迎え、地方から中学、高校を卒業した青少年が集団就職で東京に出てきていました。東京の下町である興望館周辺にも多くの若者がいたので、彼らのために扉を大きく開き、一人でも多く迎え入れて“共に歩む”ことを意図して、体育館を含む青少年館建設を計画しました。しかし、資金面で大きな困難を抱え、何度も計画が練り直された結果、当初1966年（昭和41）着工予定だったものが、実際に手掛けられたのは1969年（昭和44）でした。青少年館は1970年（昭和45）に完成し、結成された興望館友の会（興友会）により、隣保事業の具体的な活動として、老若男女問わず様々なプログラムを行いました。

この時代は、第二次ベビーブームを迎えた時期でもあり、日本経済も好況期でした。興望館の周辺地域でも家内工業や自営業が多く、夫婦や家族全員で仕事をするため、子どもの養育について、保育園に対する期待は大きいものでした。そのため、興望館保育園も入園希望者が殺到し、定員も創設以来最大の219名に設定されました。しかし、入園できない子どもも多くおり、そのニーズに応えるため、1972年（昭和47）4月に文部省の幼稚園の類似園（準幼稚園）として東京都の認可を得て、青少年クラブの中に幼児クラブを開園しました。幼児クラブは、4・5歳児の各定員30名の少人数制で、宗教的情操教育をベースとし、体育と絵画に専門講師の指導があり、夏には沓掛学荘での幼児キャンプがあるというユニークな教育内容でした。その後、1985年（昭和60）頃から社会が少子化に向かい、1993年（平成5）3月で22年の歴史に幕を閉じました。

青少年館の建設を機に、青少年クラブが地域活動部と名称を変え、学生ボランティアの出入りも活発になりました。そこで、日常的なボランティア活動の場を提供することで、その組織化が図られました。新しいプログラムとして野球チームや教科教室の発足、キャンプやバザーの活性化、地域体育祭の開催、ボランティア・リーダー会の発足など活動は拡大していきました。

## 1980年（昭和55）～1989年（平成元）

保育のニーズは、女性の社会進出や核家族化、男女雇用機会均等法の制定など社会状況の変化により、さらに多様化しました。0歳児保育の実施については慎重に検討され、1987年（昭和62）に東京都の認可を得てスタートしました。また、長時間保育のニーズも、駅に近い保育園であり学童クラブも併設しているという理由で高まり、1991年（平成3）から朝7時半から夕方7時までの延長保育を実施しました。

軽井沢の沓掛学荘は、養護施設として入所児のケアを行ってきましたが、不登校、養育拒否、養子縁組・養育家庭の関係不調、被虐待の経験を持つ子どもや高齢児の入所が多くなるなど、社会情勢の複雑化を反映し、入所児童の抱える悩みも多様化しました。1988年（昭和63）に養護委員会を組織し個別支援検討等を行うほか、敷地内に高齢児向けのグループホームを設けるなどハード面の整備も進めました。

学童クラブの活動も、1980年代にはいると一日平均36人と増加し、1989年（平成元）には一日平均41人、障害児も数人在籍するなど、さらに活発化します。この頃から、0歳児から小学6年生まで、保育園・学童あわせて12年間通うような「興望館っ子」も出てきます。その後、1993年（平成5）4月には墨田区から学童クラブの認可を受け、2004年（平成16）には定員を80名に拡大するなど、さらにニーズは高まっていきます。

## 1990年（平成2）～

地域活動部では、地域のニーズの変化により、学童クラブ、キャンプ、年配者プログラムが中心事業になっていきます。年配者プログラムは、1984年（昭和59）に山中湖バスツアーや敬老の日の集い、落語会、書道会などのプログラムが開始され、活動後の昼食提供が1990年（平成2）6月から「お食事友の会」に発展します。食事提供に加え、歌、誕生会、子どもとのふれあい、オムツたたみボランティアなどの活動を提供し、高齢者世帯・単身世帯が増加傾向にある地域の中に、相互交流・世代間交流の場を生み出しました。

国際交流についても、1986年（昭和61）にフィリピンのソーシャルワーカー研修を受け入れて以降、海外からの研修や見学が増加します。1990年代にはいると、興望館からも職員、ボランティア、各会員などのチームが度々海外を訪問するようになるなど増々盛んになっていきます。1992年（平成4）には、GAP（英国国際交流団体）からの受入を開始し、国際交流の中心的プログラムとなっていきます。

2010年代にはいると、曳舟駅前の再開発が進み、タワーマンション建設で新住民が流入する一方、古くからの住民や商店の立ち退きで地域社会は変化し、利用ニーズも変化します。2015年（平成27）には、バザーが後援会主催による「興望館デー」に転換し、人と人とのつながりを大切にする開催目的が前面に打ち出されます。

## 興望館の100年

興望館の100年は多様な人々によって支えられてきた。

興望館がこれまで果たしてきた役割のなかで、特に重要なことは、地域に住む人々と地域活動団体などとの“結び目”的な役割である。

興望館には、0歳から100歳までの人々の生活がある。職業、住居環境、働く時間、家族形態など多様な生活がそこにある。子どもについての考え方や個人的な価値観の変化、世代、生育環境、生活様式などの多様化、異質化など、社会環境の変化は著しい。しかし、社会がどのように変化しようとも、一人ひとりの人間が持つ価値が減ずることはない。

さまざまな人々が住み、日々生きているその場所で、人々の暮らしを守りつづけるということは、セツルメントの実践活動の基本である。

子どもたちが健やかに育ち、巣立ってゆく場所であり続けること。地域共生社会の先導者として100年前からはたしてきた役割を、これからも継続して担いつづけてゆくこと、そして、地域の人々にとって「希望への扉」でありつづけること。これが興望館の次なる100年への展望であるとともに、次代を担う人たちへの期待でもある。

『興望館100周年記念誌 希望への扉』（2019、社会福祉法人興望館）野原健治の挨拶より（抜粋）